BizRobo! 導入事例

社会医療法人財団董仙会
恵寿総合病院さま



130体を超えるロボットが多忙な病院の医療を支える

1934年の開院から90年以上の歴史を持つ恵寿総合病院は、2021年からBizRobo!を導入するなど、いち早く「医療DX」に取り組んできました。導入の初年度から業務効率化を推進し年間9,000時間もの業務時間削減を達成。その後も生産性向上やタスクシフトによる業務負担軽減を実現し、「日本一働きやすい病院アワード2024」で大賞の栄誉にも輝いています。

同法人のある石川県七尾市は、2024年の能登半島地震で大きな被害を受けました。しばらくは通常医療に加えて災害医療、被災の復旧作業と、それまでの日常業務の3倍量に匹敵する業務を強いられました。その際にも、ロボットが動き続けて診療を支えました。今回は同法人で稼働している130体を超えるロボットの中から代表的な活用事例をご紹介します。

Profile

社会医療法人財団董仙会
恵寿総合病院
Keiju Medical Center

石川県七尾市の恵寿総合病院は、開院90年の歴史を誇り、急性期から地域包括ケアまで総合的な医療を地域に提供している病院です。

法人名
社会医療法人財団董仙会恵寿総合病院

事業内容
総合病院

WEBサイト
https://www.keiju.co.jp/

お話を伺った方



理事長
神野 正博 氏



理事長補佐
神野 正隆 氏



データセンター
DATALAB 係長
池田 征弘 氏
(放射線技師)



看護部副部長
船山 真理子 氏

Copyright © OPEN, Inc. All Rights Reserved.

※記載している内容は取材日時点の情報です。

RPA導入の背景

人口減少が進む地方の病院に「医療DX」は不可欠！

2010年代から「人手不足」が同法人の大きな経営課題となってきました。能登半島エリアにおける人口減少が顕著になりはじめたからです。神野理事長は、女性や高齢者の雇用を推進するなどの対策を打ちましたが、その効果もやがて頭打ちになっていきました。そこで、医療の質を維持・向上させるための次の一手として、DXによる業務効率化やタスクシフト・シェアで生産性を高めることを目指しました。

2020年に入職した、MBAホルダーでもある神野正隆理事長補佐の協力も得て、法人内のデジタル化として、2021年にBizRobo!を導入。あわせて、法人内固定電話とPHSを廃止してモバイル電子カルテ搭載の業務用iPhoneを導入するなど、積極的にDXを進めてきました。



BizRobo!を選んだ理由

400～500床の病院での「導入実績」や「伴走支援」が決め手に！

神野理事長がRPAの存在を知ったのは、2021年の初頭。当時、副会長を務めていた全日本病院協会のスタッフからの紹介でした。興味を持った神野理事長は、複数のベンダーに声をかけ協会主催によるRPAセミナーを開催。そこでRPAを活用している病院の事例を知り感心します。

「人材不足の課題解決のために外注の活用は以前から考えていました。しかし、セミナーにより、ロボットに働いてもらっている実際の例をいくつも知り『これだ！』と思いました」（神野理事長）

複数のRPAソリューションの中からBizRobo!を選定したのは、恵寿総合病院と同規模（400～500床）の病院での導入実績があったことや、ベンダーの社員による伴走支援を受けられることなどが決め手になったからでした。



神野理事長

Copyright © OPEN, Inc. All Rights Reserved.

※記載している内容は取材日時点の情報です。

対象業務と導入効果

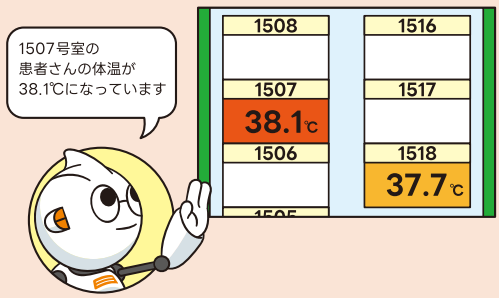
法人内の各部門の声をもとに、年間12,000時間の業務を削減！

同法人では現在までに発熱マップや退院サマリー入力の督促など、130体以上のロボットが作成されています。開発はデータセンター・情報部門などのチームが担当。チームメンバーは、看護部やメディカルスタッフ、事務職員などで構成し、兼任でロボット開発も行っています。

ロボット化の対象候補となるのは、法人内のあらゆる定型的な業務です。各部門からチームにあげられるロボット作成の申請が開発のきっかけとなります。検討を経てロボット化で効率化できると判断されると、実際に開発がスタートします。

開発 入院患者の「発熱状況」を自動把握するロボット

毎日4回自動更新で
発熱患者の位置をマップ上に表示

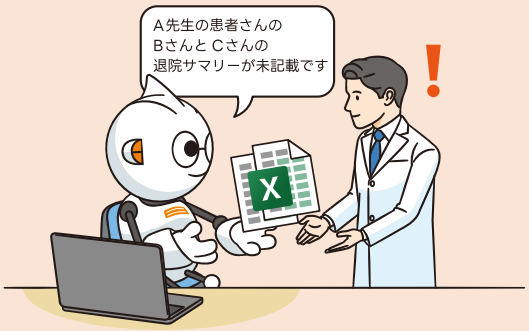


作業時間が 月83.3時間以上削減！

BizRobo!が電子カルテから収集した入院患者の発熱状況をエクセルのデータベースに落とし込み、エクセル上の病室マップに発熱患者の位置を表示。朝、昼、夜、深夜の1日4回自動更新されるので、常に最新の状況を、医師や看護師が確認でき、必要に応じた迅速な処置が可能となりました。

開発 「退院サマリー」の記載を医師に督促するロボット

医師ごとの退院サマリー
未記載患者のリストを自動作成



期限内の記載率が 4.8%向上！

BizRobo!が電子カルテのデータから退院サマリーを記載していない医師と対象の患者名を抽出。医師ごとの退院サマリー未記載患者リストを印刷、またはメールで医師に通知し、記載を督促します。これにより、退院サマリーを管理する手間が削減され、期限内の記載率も向上しました。

同法人では、このほかに「退院支援計画書作成ロボ」や「画像レポート重要所見の見落としを監視するロボ」、「病床稼働率モニター表示ロボ」など、多くのロボットが稼働しています。ライセンス上、同時稼働できるロボットは4体までなので、作成されたロボットは管理台帳に登録され、必要な時に自動的に作動するよう、24時間のスケジュールが組まれています。このような体制により、同法人では直近で、年間12,000時間の業務時間削減を実現。さらに、ロボットを活用することが、業務の効率化だけでなく「医療の質の向上」や「収益の向上」にもつながっています。

Copyright © OPEN, Inc. All Rights Reserved.

※記載している内容は取材日時点の情報です。

今後について

「RPA」や「AI」活用して、理想の医療に専念できる環境づくりを

神野理事長は、今後のDX推進について、大きく2つの方向があると考えています。1つは、RPAによる業務改善をより推し進める方向です。そのために、同法人では各部門がどのようにRPAを利用し、どのくらい業務を削減しているのかといった成果を計数化し、全スタッフに公開しています。それによって、RPAの活用に消極的だった部門やスタッフも業務改善を“我がこと”として捉えて実践するマインドが広がっています。

もう1つの方向は、RPAと生成AIとの連携です。生成AIに判断させる前作業をRPAで自動化できれば、人間がおこなう作業をさらに減らせます。「医療従事者にしかできない仕事以外のタスクをロボットやAIに任せられる環境が作れれば、理想の医療に専念できると考えて、多くの優秀な医療人材が集まってくれる。結果的に医療の質も高まるはずです」と、神野理事長は期待しています。



入院患者の「発熱状況」を
自動把握するロボット

現場の声

「自分たちでロボット開発ができる」BizRobo!のメリットは大きい

ロボット開発担当チームのメンバーは、たまたまコンピュータが得意だった看護師や放射線技師、事務職員など現場のスタッフで、IT専門家ではありません。だからこそ、現場感覚に基づいた開発ができますし、自分たちで開発しているので、既存ロボットの改良なども、小回りがききます。興味を持つ人なら、短期間学べば劇的な業務効率化につながるロボットを開発できるのがBizRobo!の良さだと感じています。


船山氏


池田氏

どんな作業をロボットにやらせるのかを、現場のスタッフが洗い出す段階で、定型化や標準化ができる業務と、その都度の判断が必要な業務を仕分けることができます。そのプロセス自体が、作業手順のムリ、ムダ、ムラに気づくきっかけとなり、業務内容そのものの見直しにも役立ちます。

Copyright © OPEN, Inc. All Rights Reserved.

※記載している内容は取材日時点の情報です。